

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

2

Vol.47 No.2 FEBRUARY

2024

子どものけいれん対応 地域から病院までの シームレスな看護をめざして

最終回

もっと知ろう！障害がある
子どもと家族のくらしの支え方
医療的ケア児等支援
スーパーバイザー看護師の活動



へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第32回 書くためには

2月はずっと寒い季節だ。雪国で育った私は、朝から水道管が凍りついて水が出ない、と母が困っていた姿を思い出す。寒いと、筆が進まない、と言いつをしたくなるものの、連載の締切りが1カ月の経過を知らせてくる。今月こそは原稿が書けない、スランプになるのではないかと、物書き風な顔をしてみる。そこに追い打ちをかけるかのように、寝違えて、首が回らなくなった。つい先日、寝違えた職場の事務の人にお大事に、と言っておきながら、もはや他人事ではなくなる。

夜、家人に「寝違えた人用の湿布を買ってきて」と念を押す。「薬局の人に聞いたら、寝違えても、捻挫しても打撲でも、この湿布で良いらしいよ」と手渡される。そんな大雑把な症状の分類で、本当に効くのだろうか、と疑いの目を向ける。だが、久しぶりに湿布を貼ってみると、これは何たる爽快感。しかも、きれいに貼れるように、繰り返し貼って剥がせる粘着に工夫がなされている。湿布も進化したものだなあ、と有り難みが増す。ところが、どんなに湿布に感謝しても、原稿に文字が浮かんでくるわけでもなく、どこかに原稿が書けるユニークな場所はないかと調べてみる。あった。その名も「原稿執筆カフェ」。

面白いのは、入店時に達成目標を書くのだ。私の場合、「絶対に1,200文字を書く」ということになる。さらに、希望に応じて、「進み具合はどうですか」と執筆

中に声かけをしてくれるらしい。入店時の利用規約には「目標を達成するまで精算できません」「閉店時間を過ぎると大幅に料金があがります」という内容も。目標を達成すると鐘を鳴らして、褒め称えてくれて、ほかの客人からも拍手をされるという。

目標を明確に定めるというのもコツだろうが、人がきて進捗を確かめにきてくれる、というのが実は影響力が大きいのではないかと思う。これがロボットが確かめにくる、では、どれほど効果があるのか訝しい。これを応用すれば、「看護の国試突破カフェ」「卒業論文カフェ」と多角経営ができそうだ。いや、大学のなかでさえ空き教室を利用して、行えるのではないだろうか。

心理学には、「社会的望ましさ」や「傍観者効果」という、実験結果から導かれた概念がある。要するに、人は人前でいい格好をしたがる、ということである。人は人に気かけられることで、頑張れるのだ。私なら、「応援していますよ」というエネルギーがわかりやすい若い女性店員に声をかけてもらいたい。彼女の目の前で、きっとスラスラ執筆している自分の姿を見せたいかもしれない。それも環境が為せる技だ。

そう、選択肢があるならば、環境は選んだほうが良い。と締めくくりたいところだが、この原稿は通勤電車のなかで書いている。もはや環境を選んでいる時間はないのだ。くれぐれも私みたいにならないように。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。